

助動詞「なり・たり」確認テスト（断定） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 断定。「物（体言）＋なり」で「～である」の意。「なくてはならぬ物である」。

問2 「御使ひ」は名詞（体言）。体言に接続しているので、ここでの「なり」は**断定**と判断できる。推定・伝聞の「なり」は終止形（ラ変は連体形）に接続するため、体言の下に来る「なり」は断定である。

問3 (1) 連体形（サ変動詞「す」の連体形「する」）。(2) 断定。連体形に接続し、「(女も) するのである」の意。なお有名な「男もすなる日記」の「すなる」は終止形「す」＋伝聞「なり」だが、設問の「するなり」は連体形接続で断定。両者の対比に注意。

問4 「あ／なれ」と分け、もとの形は「あり（ラ変動詞「あり」の連体形「ある」の撥音便「あん」の「ん」が表記されず「あ」となった形）＋なり」。「なり」の文法的意味は**推定（または伝聞）**。声を聞いて「僧がいるようだ」と推し量っている。

問5 **連体形**。ラ変動詞「あり」の連体形「ある」が撥音便化して「あん（なり）」となり、「ん」が無表記で「あなり」となったもの。推定・伝聞の「なり」はラ変型には連体形に接続する。

問6 断定。「主（体言）＋たり」で「～である」。「今や天下の主である」。

問7 **根拠**となる。断定の「たり」は体言にのみ接続するので、直前が体言「主」であることは断定の根拠となる。完了の「たり」は連用形（活用語）に接続するため、体言に付く「たり」は断定と判断できる。

問8 **タリ活用**の形容動詞「堂々たり」の**連体形**。「堂々」のような疊語・状態を表す漢語に付く「たり」は、学校文法では断定の助動詞ではなく、一語のタリ活用形容動詞の一部（活用語尾）と分類するのが標準である。体言「軍勢」を修飾しているので連体形。「堂々としている軍勢が」。断定の助動詞「たり」は、⑥「主たり」のように自立した体言に付く場合をいう。

問9 文法的意味は**断定**、活用形は**連用形**。下に過去の助動詞「き」が続くので連用形「なり」。「昔は都であった」。

問10 昔は（ここは）都であった。

問11 文法的意味は**断定**。直前の「旅人」は名詞（体言）。「行き交う年もまた旅人である」。

問12 **推定（伝聞）**。「多かり（形容詞「多し」のかり活用）」の終止形「多かり」が「多かん」と撥音便化し「ん」が無表記となって「多かなり」となったもの。終止形（ラ変・かり活用は連体形相当の語形）に接続している点が、伝聞・推定であることの根拠。人の話を聞いて「多いそうだ」の意。

問13 (1) 断定（「関白の子であった」）。(2) 連用形。下に過去の助動詞「き」の連体形「し」が続くので連用形「たり」。

問14 **断定**。「(これは) 谷の底で水が流れる音である」の意。「谷の底に」の「に」は連体形「流るる」にかかる格助詞で、「なり」とは結びつかない。直前が体言「音」で、文脈も「これは～の音だ」と判断を述べているの

で断定。存在（「～にある」）の用法は、「春日なる三笠の山」のように連体形「なる」で場所を示す形が中心で、ここには当たらない。（推定・伝聞ではない点も重要。）

問15 断定。「要害（体言）＋たり」で「(国の) 要害である」。断定の「たり」は漢文訓読調の文章で、「主たり」「将軍たり」のように身分・資格・性質を表す体言に付きやすい。なお「堂々たり」のような状態を表す語に付く「たり」は、タリ活用形容動詞の一部として区別する（問8参照）。

問16 と＋「あり」。断定「たり」は「と＋あり」が縮まって成立した語で、⑨「旅をすみかとする」の「と」と同じく、もとは格助詞「と」に「あり」が付いた形である。一方「なり」は「に＋あり」から生じた。

問17 (1) 断 (2) 推 (3) 推 (4) 断

問18 断定の「なり」は連体形・体言に接続し、推定・伝聞の「なり」は終止形（ラ変型は連体形）に接続する。

問19 いずれも断定ではない。④「ぬる」は完了（強意）の助動詞「ぬ」の連体形（「おどろかれぬる」＝はっと気づかれてしまう／気づかれることだ）。⑫「たり」は断定の助動詞「たり」（「関白の子であった」）。※⑫の「たり」は断定なので、ここでは「④のぬるが完了で断定ではない」ことが要点。⑫の「たり」が完了か断定かは直前が体言「子」であることから断定と判定する。

問20 (1) 行き交う年もまた旅人である。(2) 君は今こそ天下の主である。

問21 断定の「なり」は「に＋あり」、「たり」は「と＋あり」のように、いずれもラ変動詞「あり」を含んで成立した。活用の中心が「あり」であるため、その活用のしかたを受け継ぎ、ラ変型（ら・り・り・る・れ・れ）に活用する。

問22 断定の「なり」は「に＋あり」、すなわち体言や連体形（＝名詞的にとらえた内容）に「あり」を付けて「～である」と性質・身分を述べる語なので、体言・連体形に接続する。一方、推定・伝聞の「なり」は、音や人の声・うわさといった「聞こえてくる事態」をもとに「～ようだ・～そうだ」と判断を述べる語で、言い切りの内容（終止形、ラ変型は連体形）を受ける。したがって、終止形（ラ変は連体形）接続なら推定・伝聞、連体形・体言接続なら断定と見分けられる。